

第2章 緑の変遷と現状

2.1 本市の緑の歴史

先人の緑に関する知恵や経験に学び、現在から未来にわたり本市の緑をさらに充実させるため、本市の緑の変遷を振り返ります。

時代	時代の特徴
明治～大正	戦争による焦土からの復興と「森の都」の始まり
昭和初期～昭和中期	水害からの復興と「森の都」の再生
昭和中期～昭和後期	大気汚染などの進行による「森の都」都市宣言
昭和後期～平成中期	緑に関する意識が高揚
平成後期～令和	緑を活用した災害などに強い、持続可能な都市づくりの始まり

コラム

●先人により守り継がれたみどり

「花畑公園の大楠蘇生大作戦」

本市中心部の花畑公園に生い茂る大楠は、「森の都」のシンボルの存在です。樹齢は600～700年と言われ、市指定の天然記念物となっています。標高29m、幹囲7mあり、街の中に市街地のオアシスを作っている巨木ですが、昭和48年の夏に急激に枯れ始め、市民の一大関心となりました。原因は、老齢化、自動車の排気ガスの増加や、根の周りがコンクリートや踏み固められてしまったことなどによる生育環境の悪化にあったとされています。

蘇生作戦には、多くの市民や専門家の衆知を集め、膨大な労力と経費を投入し、一命を取り留めることができました。

市民と行政が一体となったこの蘇生作戦こそが、後の「森の都」作戦の基調となるものでした。



▲花畑公園の大楠

2.1.1 明治～大正

明治初期、西南戦争が起こり熊本は焦土と化しました。明治、大正の近代化の波を受け、本市も大きく近代化が進みました。

- ◆1877(明治 10)年 西南戦争が起こり、熊本の中心部は焦土となる
- ◆1889(明治 22)年 本市が誕生 (市制施行)
- ◆1891(明治 24)年 熊本駅が開業
- ◆1894(明治 27)年 文豪 夏目漱石が上熊本に降り立つ
- ◆1908(明治 41)年 旧第一高校にクスノキが植樹される ※現在の「オークス通りクスノキ」
- ◆1924(大正 13)年 市電が開通

【西南戦争直後の中心部の様子】



出典「新聞に見る世相くまもと」熊本日日新聞社

2.1.2 昭和初期～昭和中期

昭和 28 年に白川が氾濫し「6.26 大水害」が起こり、本市内は水と泥と流木で埋め尽くされます。その後、緑化による水害対策を推し進め、市民一丸となって「森の都」を取り戻す活動が進みます。



▲大水害の様子

出典「ふるさとの思い出写真集明治大正
昭和熊本オンデマンド版」国書刊行会

- ◆1930(昭和 5)年 花岡山・万日山、八景水谷、立田山、水前寺、江津湖、本妙寺、千金甲の 7 地区、約 1,600ha を風致地区に指定
- ◆1953(昭和 28)年 6.26 大水害（白川大水害）
白川が増水し、沿川一帯が氾濫
- ◆1954(昭和 29)年 水害を緑化で防ぐ「森の都」再び作戦の展開
治水造林を強く意識し、水害で汚れた都市を緑一色で埋めようと、「植えて明るい” 緑の国” へ」を市民運動のスローガンとして、緑化推進事業を展開

コラム

●市民総出で取り組んだ緑化推進事業

昭和 29 年、前年の大水害で荒れた本市内の緑化が始まりました。教材用、模範林造成のための造林用杉を小中学校に無償交付したほか、桜の名所の観光地整備として花岡山に 1,000 本、八丁馬場に 200 本、八景水谷と神水町に各 100 本のサクラを植樹し、さらに、神社、銀座通り、江津湖にもウメ、ヤナギ、唐シュロを無償交付して植樹を行いました。

また、有償苗木として造林用苗 5,000 本、鑑賞樹苗 5,000 本、果樹苗 1,000 本、茶樹苗 3,000 本、苗種子一石、記念樹苗 2,000 本を準備して市民に呼びかけるとともに、植樹祭、緑化祭の実施、緑化の標木を建立、水害記念樹 1,000 本の植樹など市民総出で緑化を行いました。

参考・引用「新熊本市史」第 1 編新しい時代の流れ 第 4 章市民の生活

2.1.3 昭和中期

高度経済成長による急激な都市化の波と大気汚染などの進行に伴い、熊本市議会において「森の都」都市宣言が行われ、緑に関する意識の高まりとともに、官民一体となった積極的な「森の都」作戦が展開された時期で、以後の本市の緑の礎となりました。

◆1955～1973 (昭和 30～48) 年	高度経済成長期には、都市化の進展とともに緑は減少、 <u>「森の都」の形骸化</u> 街路樹 1 本当りの市民数、名古屋市 1 本/63 人、本市 1 本/166 人
----------------------------	--

- | | |
|----------------|--|
| ◆1972(昭和 47) 年 | <u>「森の都」都市宣言（熊本市議会）</u>
<u>宣言抜粋</u>
「由来熊本市は豊かな緑、清冽な水に恵まれていたが、 <u>急激な都市化の波に昔日の面影は一変</u> しようとしている。市民の総力を結集して緑と水の保全・回復につとめ、 <u>熊本市を森の都とすることを宣言する。</u> 」 |
| ◆1972(昭和 47) 年 | <u>「森の都」作戦の展開</u>
・中心地の街路樹、県道沿いの花壇整備が行われる
・昭和 48 年～平成 8 年の 23 年間で、約 14 万本の樹木が植樹される |
| ◆1973(昭和 48) 年 | <u>「森の都推進会議」の発足</u>
・ <u>市長を本部長とする「森の都推進本部」が発足</u>
・緑化事業へ注力して森の都作戦普及の拠点として「緑化推進課」を設置 |
| ◆1974(昭和 49) 年 | <u>市木「イチョウ」、市花「肥後ツバキ」を選定</u> |

●市木、市花の決定

昭和 49 年、「森の都」宣言 2 周年と、市制 85 周年を記念して「森の都」熊本のシンボルとしてふさわしい「市の木」「市の花」を募集し、12,548 通の応募がありました。市民 56 人で構成された「森の都推進会議」の答申を受けて、市木を「イチョウ」、市花を「肥後ツバキ」に決定しました。

「イチョウ」は熊本城が昔から銀杏城と呼ばれ、古木もあり、また立派なイチョウ並木もあって市民に親しまれていること、また、「肥後ツバキ」は古くから熊本独特の花として知られ、代表的な名花であるばかりでなく、国際的にも知られつつあり、一般家庭でも容易に育てることができること等が選定理由でした。



写真出典；熊本の緑化樹木，熊本県土木部景観整備課，1993

昭和 49 年の本市議会第 2 回定例会において、星子市長は、「この緑化運動は少なくとも 30 年、できれば 50 年続いていったならば、この熊本市が本当に素晴らしい都市になるのであろうということを夢見ている」と答弁しています。



肥後ツバキ

写真出典；熊本市観光ガイド

●火伏の木

本市の木であるイチョウは、街路樹として市内に多数植えてあります。イチョウは、空に向かって立つ姿が美しく、秋は紅葉し街並みに彩を与え、イチョウの実「銀杏」は食用とされます。イチョウが街路樹として重宝される理由はそれだけではありません。イチョウは古くから「火伏の木」と呼ばれ、水分が多く耐火性があることから、学校や街路樹、神社仏閣などに植えられてきました。大正 12 年に発生した関東大震災、平成 7 年に発生した阪神・淡路大震災などでは、イチョウなどの水分が多い樹木が延焼を防いだという事例が残っています。

葉に含まれる水分が延焼を防止する、枝葉が火の粉の飛散を防ぎ消火する、火事の際には避難経路の目印になるなど、樹木の防火機能を考慮し、避難場所の緑地のあり方を考えることも大切になってきています。

2.1.4 昭和後期～平成中期

緑に関する意識が高まり、様々な取組が進められる一方で、人口増加とともに市街地は拡大していきました。

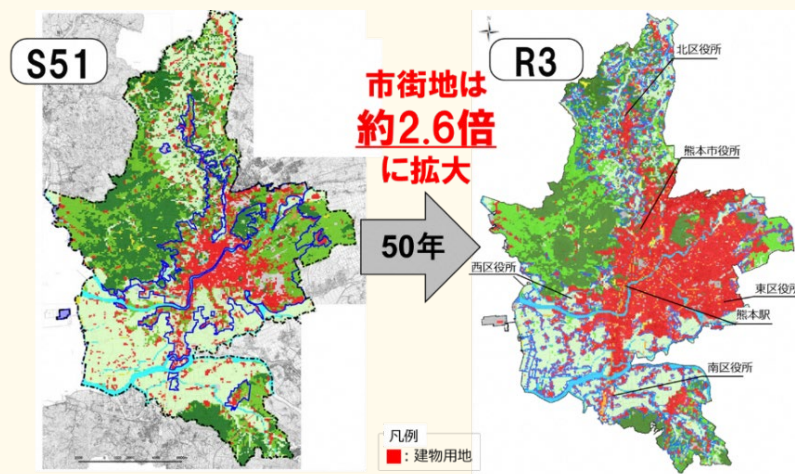
- ◆1975(昭和 50)年 記念樹配布事業の開始
- ◆1976(昭和 51)年 「地下水保全都市」宣言
- ◆1985(昭和 60)年 「くまもと緑の3倍増計画」
熊本益城大津線（通称、第二空港線）のクスノキ並木の植樹
- ◆1985(昭和 60)年 国土緑化運動の中心的な行事である「全国植樹祭」が阿蘇市で開催
- ◆1986(昭和 61)年 緑と水の祭典、第4回全国都市緑化くまもとフェア「グリーンピック' 86」が開催
- ◆1995(平成 7)年 「環境保全都市」宣言
- ◆2007(平成 19)年 国土緑化運動の中心的な行事である「全国育樹祭」が阿蘇市で開催

コラム

●急速な市街地の拡大

熊本の市街地は、戦争や水害などの惨事に度々見舞われましたが、その度に様々な取組により、緑を取り戻してきました。

一方で、時代の流れとともに市街地は拡大し、本市の緑の減少が著しく進みました。今もなお市街地は拡大し続けています。



2.1.5 平成後期～令和

地球温暖化、頻発する災害、ストレスを抱える人の増加、コミュニティの希薄化などの課題が山積みする中、公園・緑地などの緑空間の存在価値が見直され、災害に強い都市、持続可能な都市づくりを進めています。

- ◆2010(平成 22)年 市町村合併により新熊本市の誕生
- ◆2016(平成 28)年 熊本地震が発生
オープンスペースである公園や緑地などの重要性が再認識される
- ◆2020 令和2年7月豪雨が発生
(令和 2)年 球磨川が氾濫し、人吉地域を中心に甚大な被害が発生
これをうけ「流域治水」や「グリーンインフラ」による防災、減災対策が推進されることとなった
- ◆2020(令和 2)年 新型コロナウイルス感染症が世界レベルで蔓延
新型コロナウイルス感染症の蔓延により「新しい生活様式」の定着が求められるなか、公園の価値が再認識され、感染症蔓延防止やストレス緩和、運動不足の解消などの目的で、多くの人々により公園が活用された

●「森の都育ての父」河喜多義男氏

河喜多義男氏は、「森の都育ての父」と呼ばれる人物です。

河喜多氏は1854年（安政元年）に現在の菊池郡菊陽町の士族の家に生まれました。14歳の時、本市に転居し、士族や農民の貧しさを目の当たりにして自ら廃刀、断髪して庶民の姿となりました。



安政元年（1854年）
～昭和9年（1934年）

1877年（明治10年）の西南戦争で戦場となった市街地は、焼野原となりました。農村の暮らしは貧しく、河喜多氏自身の生活も楽ではなかったなか、和服に草履、背中には大きな包みを背負って日本各地の農業先進地を視察し、科学的農法を学びました。ふるさと熊本に帰って農産物の良品を生産、養蚕業から一步進んで製糸業の開業、農事試験場を誘致、県立熊本農業学校の創立に奔走など、貧しい庶民の救済に努めるとともに後進の育成に情熱を傾けました。

農業に身を投ずる傍ら、持続的な資源を創出し、外貨を獲得する方法を模索、植樹に思い至ります。香高い常緑樹で、幅広い用途に使えるクスノキに着目し、46歳（明治32年）の時に苗育成を始め、3年後から植樹に取り掛かりました。クスノキ約10万7千本、ケヤキ、サクラ、イチヨウ約10万本、計約20万本の植樹を行い「森の都」くまもとの緑化に大きく貢献しました。

1934年（昭和9年）12月に81歳で亡くなりましたが、1973年（昭和48年）に熊本県近代文化功労者として顕彰されています。



▲旧合同庁舎前



▲熊本大学

参考：「熊本県近代文化功労者」熊本県教育委員会

2.2 緑に関する市民意識調査

緑に関する市民の意識や思いを把握し、本プランに反映させるため、市民意識調査を実施。

項 目	内 容
対象者	学生以上
実施方法	① 街頭アンケート（下通アーケード内） ② 本市 Web アンケート
調査日時	① 街頭アンケート …2024 年 9 月 12 日木曜日 ② 本市 Web アンケート …2024 年 9 月 25 日水曜日 ～2024 年 10 月 17 日木曜日
サンプル数	① 街頭アンケート…184 サンプル ② 本市 Web アンケート…944 サンプル
アンケートの概要	① 回答者の属性 ② 緑への関心 ③ くまもとの緑の変化 ④ 重要だと感じる緑の役割 ⑤ 「森の都」の認知度 ⑥ 「森の都」の魅力を高める取組

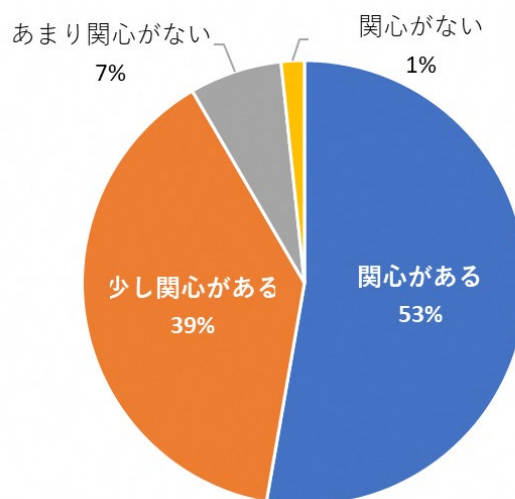
■緑への関心

質問 緑に関心がありますか？

項目	回答数	学生	20代	30代	40代	50代	60代以上
関心がある	595	8	25	70	92	161	239
少し関心がある	438	8	45	95	112	110	68
あまり関心がない	76	0	6	19	25	21	5
関心がない	19	3	1	8	3	2	2
合計	1128	19	77	192	232	294	314

○92%が緑への関心を持っています。

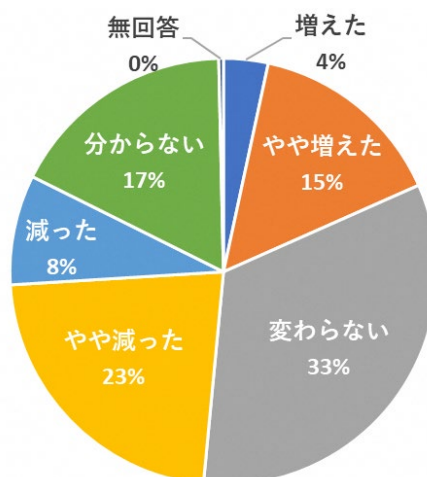
○60歳代以上が緑への関心が高い傾向にあります。



質問 10年前と比較して、くまもとの緑をどう思いますか。

(単位：人)

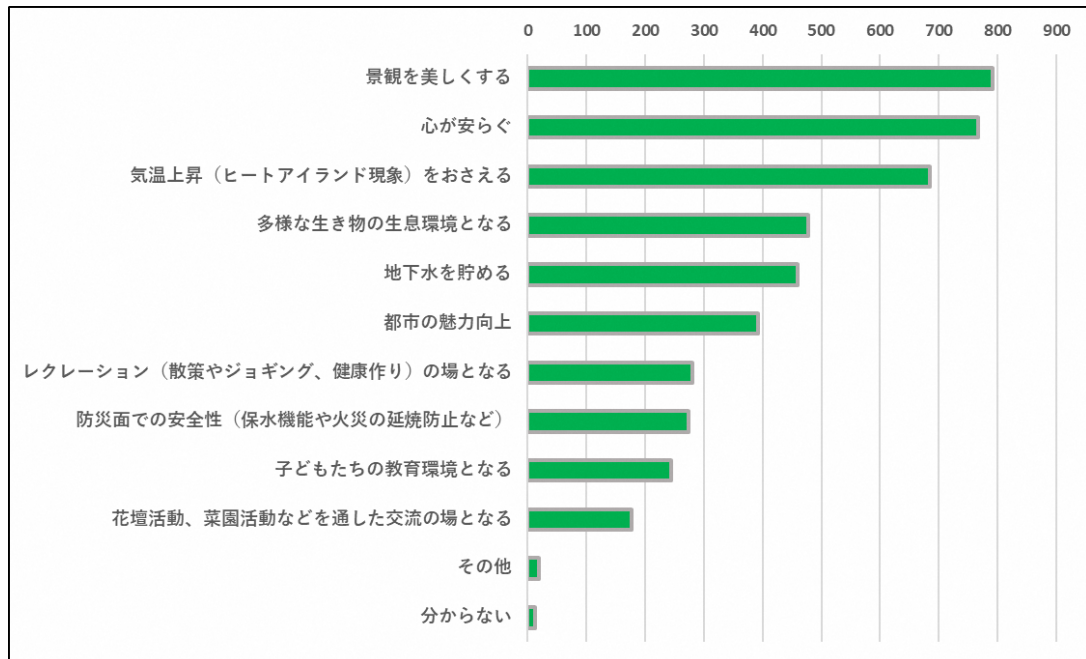
項目	回答数
増えた	38
やや増えた	169
変わらない	374
やや減った	254
減った	94
分からない	195
無回答	4
合計	1128



○10年前と比較して、19%が「緑が増えた」、33%が「変わらない」とする反面、31%が「緑が減った」と感じています。

■重要な緑の役割

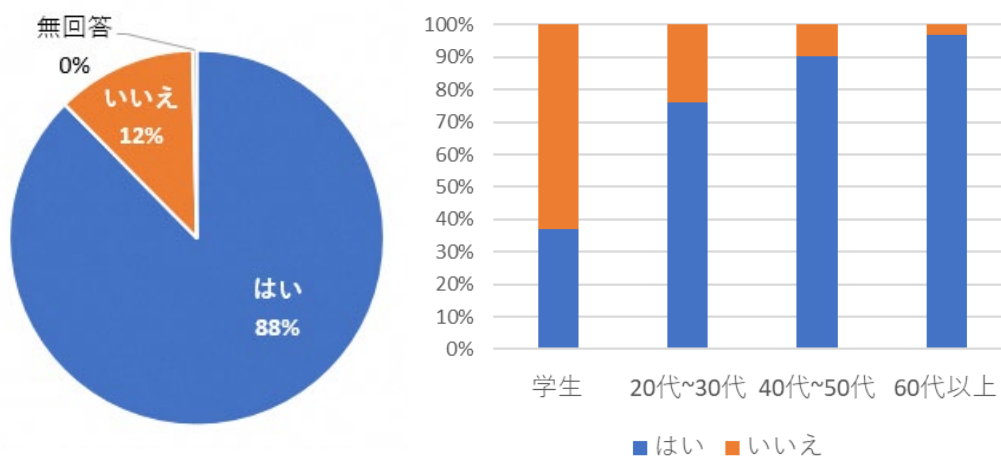
質問 緑の役割で大切なものは何だと思いますか。(複数可)



○緑の役割では、「景観を美しくする 791 人（70.1%）」、「心が安らぐ 767 人（67.9%）」、「気温上昇（ヒートアイランド現象）をおさえる 684 人（60.6%）」となっており、癒しや景観、都市環境の改善と様々な役割が緑に求められています。

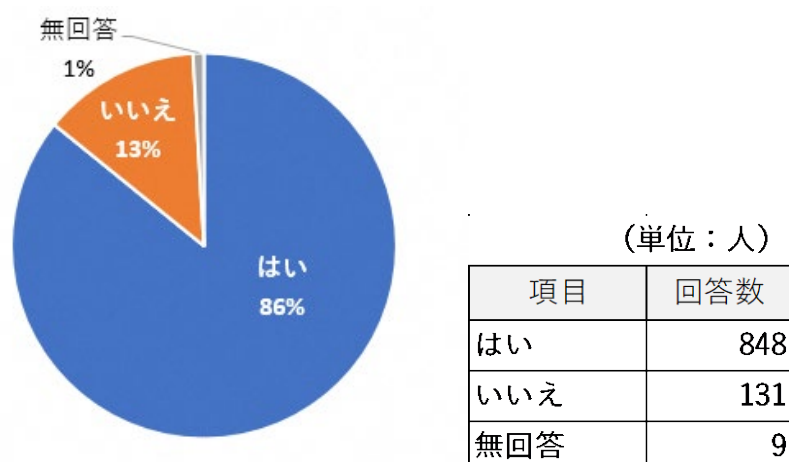
■「森の都」の認知度と誇り

質問 くまもとが「森の都」として知られていることをご存知ですか。



○くまもとが「森の都」として知られていることを88%の方が知っていますが、若い年代ほど認知度が低くなっています。

質問 上の質問にはいと答えた人は、それを誇りに思いますか。



○「森の都」として知られていることを知っている人のうち、86%がそれを誇りに感じています。市民の誇りとして「森の都」を継承していくことが森の都再生に向けて重要であると言えます。

■「森の都」としての魅力を高めるための取組

市民アンケートでは、以下のような意見が出ました。

- 熊本城、三の丸、大きいサクラ残っているものを助けて増やして。
- 緑は街づくりに欠かせない要素だと思う。緑があれば、殺風景なのも改善できるし、景観だけでなく人間がほっとできる大切なものだと思う。
- 公園をふやして欲しい。
- 市がお金をかけて緑を増やすだけでなく、アイディアと技術で魅力的な緑の場づくりを行う。人を惹き付けることで、企業や個人が魅力に気付いて行動すると思います。場所づくりと同時にアピールも必要だと思う。
- 少子化により緑豊かな熊本を継承していく人材について見通しが明るくないと思います。すぐ近くに緑があることの有難さを認識できる環境を官民一体となり作っていく必要があるのではないのでしょうか。
- 木々が目立つように電信柱等をさらに広範囲で地中化し、かつ、花壇や苗木を増やす。
- 山林を切り開いて太陽光パネルを設置するようなことを規制する（景観も悪く、地下水への影響も心配）。
- 植林のイベントを行う。
- 「市民の森」という憩いの森があればと思いました。

■「森の都再生プラン」への反映

アンケートで得た市民の意見を反映し、緑に関する以下の取組を進めていきます。

- くまもとの緑が減ったと感じている方が多いことから、緑を増やす取組や、今ある緑を守る取組を進めます。
- アイディアと技術で、魅力的な緑を増やす取組を進めます。
- 地域の緑や景観に対する誇りや愛着を醸成していくような取組を進めます。
- 森の都を後世に引き継ぐための、担い手づくりの取組を進めます。